

『森林の少年』（八）

D・H・ロレンス&M・L・スキナー

山田晶子 訳 著

第5章 子羊たちの帰宅

5

ジャックはなおも袋を縫っていた。午後であった。駅伝馬車の音が聞こえないかと耳を澄ましていた。もちろん夕闇が迫るまでは到着しないだろうとは思っていたのだが。

オーストラリアに来てから警戒心が増していたので、耳が聞きなれない物音に敏感になっていた。いや、それは彼の耳のせいではなかったであろう。土着のブッシュマンは、更に研ぎ澄まされた能力を発達させたのだ。周囲に生じる異常な不穏さを「感知」して、それを読み取る心理的な能力を発達させたのであった。ジャックはまさしく新しいオーストラリア人であった。彼はトムのうちはこの能力があることに気がついていた。

そして自分でもそれを持ちたかった。一種の霊能力を備えた人間のように肉の耳で聞こえないものも聞き取れるようになった。か。

実際に彼が聞くことができたのは、肉の耳が捉えたことだけであった。また彼が見ることができたものは、肉の目が見たものだけであった。子供たちが裏庭で遊んでいた。埃のなかにその姿が見えた。エリスの奥さんは、今も洗い桶のそばにいた。その蒸気が見えた。ケイティは二階にいた。以前彼女が窓にいるスズメバチを捕まえているところを見たことがあった。男たちは農地を鋤いていて、馬が遠くに出ている。豚はブウブウ言いながら歩き回っていた。牛や鳥は全部囲い地にいた。祖母は、審判を下す主のように突然現れるのでなければ、物音一つ立てなかつた。そしてラケット先生はいつも静かであった。ほとんどいつも気味が悪いくらい静かであった。

まだ雨季が続いていた。だが午後は暖かくゆつたりとしていて、眠気が生じるほど穏やかで物音が聞こえなかった。彼は立ち上がり敷居の上に立つて伸びをした。それから納屋を通り過ぎると、そこに誰かがいたが、それはレッド・エアスであった。

「入れ。」  
と、レッドが叫んだ。

「伯母さんにハーバートが事故にあつたので中へ連れて行く、と言ってくれ。」

確かに、皆が男を担架に乗せて運び入れていた。

エリスの奥さんは舌を鳴らした。

「チチー チチー チチー チチー——あいつらは何か採め事があると家へ来るんだから。」

だが彼女は直ちに肌着をしまつてあるタンスまで行き、それから居間へ出てきた。

祖母は火を少し焚いている隅に座っていた。

「誰が怪我をしたんだい。」

彼女は試すように訊いた。

「うちの者じゃないといいが。そうあつて欲しいね。」

「ジャックが、怪我をしたのはレッド・ハーバートだと言つてるよ。」

エリスの奥さんが返事をした。

「それじゃ坊主たちに手伝わせて小部屋へ運んでやれ。」

だが、エリスの奥さんは最愛の子供たちのことを思つて躊躇

した。

「ジャック、大怪我なの？」

彼女が尋ねた。

「担架に乗せて運んでいるよ。かなりひどそうだ。」

と、ジャックは答えた。

「おお、まあ。」

祖母は、かたくなな態度でピシヤリと言つた。

「なぜそう言わなかつたんだい。では——小部屋へ入れたくなかつたら、私の部屋のベッドへ寝かせればいいさ。だが怪我人をトムスのベッドに入れてもいいんだがね。トムはこのソファの上で寝られるんだから。」

「トム、可哀そう。」

と、ジャックは思つた。

「これっ！」

と、祖母は杖で床をバンッと打つた。

「二人組の間抜けみたいなのにそこに立っているんでないよ！働くんだけ！働くんだけ！」

ジャックは地面を見つめ、帽子をクルクル回していた。祖母はヒョイと前へ飛び出た。彼が驚いたことには彼女は義足であった。そして彼女は彼に向かつてその足を踏み鳴らした。

「あのならず者の医者連れておいで。」

彼女はびっくりするような大声で叫んだ。

ジャックは行つた。ラケット先生は自分の部屋にいなかっ

た。ジャックはハローと言つてどのドアもノックした。ドアが少し開いていたので、部屋の中を覗き込んだ。これは女の子の部屋に違いない。二台のベッド、きちんとしたキルトの掛布団と窓には青いリボン。いつ皆は帰宅するのだろうか？同じくここには二台の子供用ベッドと大人用ベッドがあった。彼は閉じたドアの前へ来た。ここにいるに違いない。彼はまたノックをしてハローと言つた。何の物音もしなかつた。ジャックは青髭の部屋へ近づいて行かざるを得ないような気分になつた。彼はこれらの部屋を探し回るのが苦痛であつた。

彼はもう一度ノックをしてドアを開けた。化学薬品のような変な匂い。ブラインドが降りたまゝの暗い部屋。二、三冊の本。暗く怪しい感覚。だが先生は不在であつた。「これで終わりだ。」とジャックは思つた。

思はず知らず彼のブーツがカタカタ鳴つて、下へ降りながら彼は神経質になつた。決して入つたことがない部屋はなぜこんなにも秘密めいているのだろうか。そしてかなり恐ろしく感じられるのだろうか。彼は気味の悪い小さな客間を覗いた。もちろん先生はそこにいなかった。真ん前には「死を待つ部屋」があつた。ドアが大きく開いていた。誰もそこにはいなかった。

ジャケットは家にいなかった。これは確かなことだつた。ジャックはこつそり歩いて家を出て、囲い地へ行つた。そこに乗馬のルーシーがいたので、それに鞍を付けて当てもなくぶらぶら乗り回したが家屋の物音が聞こえる範囲にいた。午後は

過ぎて行つた。人つ子一人視野にはいなかった。ゴムの木が、明白な幽霊のような鋭い葉を垂れていた。忌まわしい程にゴムの木はじつとしていた。そして花が咲いていたが、それらは奇妙な花で匂いがなく、心に訴えて来ない花であつた。火のように不揃いの赤い花でさえも。何も語らなかつた。遠景は澄んでいて溶けるようで美しかつた。だが魂がこもつていなかった。そしてその世界には誰も生きていなかった。オーストラリアの沈黙した寂しい陰惨さがジャックを憂鬱にした。

もうミルク搾りの時間が来ていた。ジャックは静かに裏庭へ行つた。なおも世界には生きている者は誰もいなかった。あたかも誰もが死んでしまつたかのように。いや、遠くに混血児のタイムがいた。のそのそとした、来るのがいやいやの牝牛を、ゆつくりとした夢の中の情景のように連れてきた。

すると裏の戸口から半袖姿の父さんが出てきた。いつもと同じ落ちていた表情とボスの顔つきをしていたが、一層土色の顔色で肥満していた。この顔つきはチョッキと懐中時計から出てきたものだつた。父さんはいつもチョッキを着て懐中時計を持つていたが、それだけでも飾りすぎているように思えるのだつた。

パタパタと小走りにオグとマゴグが出てきた。レンはドアの柱の回りを滑るように、そしてハリーは一人で行進しながら、ケイティは脚を引きずりながら、赤ん坊は這いながら出てきた。ジャックはみんなを見て嬉しかつた。彼らはずーと事故の

怪我人を見ていて家の中にいたのだった。退屈な、停滞した、虚無の午後であった。全ての生命がなくなっていた。今でさえも一家は、大切な一家は、ジャックには些細で陰鬱な存在に思われた。

彼はミルク搾りを手伝った。彼には苦手な仕事であった。父さんも小台に座りミルクを搾った。いつもなら父さんは監督をしているだけで何もしないのだった。監督する価値のある本物の大家族を持っているのは立派なことであった。トムはそう言っていた。「もし自分が父親になったら、九人の子供をもうけて一緒に仕事を片付けることができるのは良いことだね。」これが、ジャックが家族の一員になっても、決して邪魔に思われない理由であった。父さんは、彼をも監督していたのだった。

ようやくミルク搾りが終わった。ジャックはブーツを履き替えて体を洗い、コートを羽織った。彼は消え行く光の中を台所まで歩いて行く途中、赤ん坊を踏みつけそうになった。彼は赤ん坊を抱き上げて中へ入れた。

それから普段どおりのお茶の時間——いつもと同じく羊肉のぶつ切りと卵とステーキ——が、みんながミルク絞りに戻ってきたとき用意されていた。今日はエリスの奥さんは、やかんの下にユーカーの木を置いており、台所には永遠に続くと思われるなじみの匂いが立ち込めていた。そしてエリスの奥さんはそこでテーブルを準備していた。ふだん、彼らは朝食からずっと居間で生活していた。しかし今日はお茶は台所でされるはず

であった。葬式のときのような沈黙と雲が大気には存在していた。しかし祖母の部屋からはたくさんの騒音が聞こえてきた。

ジャックは、食事の間、赤ん坊を横に座らせておかなければならなかった。彼女は彼の髪の中にネバネバした手をつっこんだり、もたれかかったり、パンくず、湿ったパンくずを彼の耳の中に吐き出したりした。次に赤ん坊はのたうちころげ落ちようとした。しかし夕方は冷え冷えとしていて、彼女の手足は冷たく、エリスの奥さんは赤ん坊が倒れないようにしておきたかった。ジャックはもうこれ以上この状態に耐えられない気がした。するとあり得ないことのようにだったが、突然赤ん坊は眠りに落ちた。それでエリスの奥さんは彼女とハリーをベッドへ運んだ。

ああ、家族！家族！ジャックはなおもそれを愛していた。彼にとつてこの家族は全人生のように思われた。彼は、ときどきを除いて、一人つきりになりたくはなかった。しかも今日のような午後には、彼はどのような訳か家族でさえも永遠には続かないものだと思つた。では、何が？何が？

彼はたった一人の女性と結婚して自分とその女性だけがいる家に帰ってくるという考えには耐えられなかった。次に、赤ん坊たちが生まれるというゆつくりとした怪しい生き様が浮かんだ。そのような未来は彼には恐ろしかった。彼はそんなものを望んでいなかった。彼は自身の子供を欲しくはなかった。彼はこの家族を望んでいた。常にこの家族だけを。だが、この家族

についてさえも、空っぽの寝室や気味悪いプライバシーについては彼にとつて何か陰鬱なものであった。彼はこの家族のプライバシーについては考えたくなかった。

6

三人のレッドが居間を通つて出てきた。痩せて赤顔で毛むくじやらで重い足をした無骨な人間たちがお茶のために出てきた。彼らに比べれば、ワンドゥー・エリス一家は貴族であるときえ言つてもよかつた。彼らは、ジャックにハーバートを降ろすのを手伝いに行くようにと言つた。彼は気難しいからであつた。「奴は本当に気難しいんだ!」

ジャックは、レッド家の誰にも全く手を触れたくなかつたが行かなければならなかつた。彼は暗い居間へ続いている階段を二段降りて、向こうの祖母の部屋へと二段上つた。

ここには騒ぎが起こっているのに、なぜ家族は台所ではこんなにも静かでいられるのだろうか。アラン・エリスが怪我人の脚を一本持ち、ロス・エリスがもう片方を持ち、二人はだらりと横たわつた人物に、あたかも怪我をした馬に話しかけるように話した。「ドゥー、ドゥー、さあ、しつかり! おい、しつかりしな!」一方エアスは倒れこんだ人物にひどくかがみこんで、万力でも掴むかのように彼の両腕をしつかりと掴んだ。そしてジャックが片方の腕を掴みにもつと早く来なかつたので、罵倒した。

ハーバートは頭を怪我していた。そして気難しくなつた。ジャックは片方の腕を持つた。エアスはベッドの反対側にした。彼の赤っぽい金髪のおごひげが輝いていた。エアスには不思議な力があり、それはジャックを少しうつとりさせた。遠くでは、祖母がたくさんの枕に囲まれてベッドに起き上がつており、レッド・ライディング・フッドの祖母のようにみえた。薪の燃える輝く火が覆いがない炉で燃えており、羊脂でできた蠟燭が四、五本暗っぽく煙つていた。しかし祖母の四柱式ベッドとハーバートのベッドの間にはスクリーンが置かれていた。シートで覆われた木製の干し物掛で出来たスクリーンであつた。しかしながら、ジャックはハーバートのそばの自分の位置からスクリーンの向こうの祖母の位置を見ることができた。

彼の注意は患者に引き付けられていた。ハーバートは突然動き煙撃していつも突然にベッドの右側へ体を向けた。ジャックは、エアスに患者の左腕を持つているようにと言われた。そしてハーバートが乱暴になるや否や、ジャックは彼の痩せて鉄のように固い腕を掴んでいることが出来なかつた。それは自由になりエアスは飛び上がつてジャックを怒鳴つた。

これはかなりの見物であつた。祖母がシートを掛けた忌まわしいスクリーンの向こうでぶつぶつ言っているのに!

知性を働かせる以外になしよつた。レッド一家が持つていない知性を。ジャックはまたもや手を離してしまつた。するとエアスは赤っぽい輝く魔物のように病人の二本の腕

を掴みかがみ込んでいた。ジャックは以前に学んだ獣医学の経験を思い出し、自分を客観的に見つめようとした。

彼は最初に気が付いた。ハーバートはみんなが彼に抵抗しないときにはそんなに暴れなかった。第二に、彼は周囲の男たちから目を離れたときはうめくのを止めた。第三に、数度もベッドから彼が落ちそうになったその痙攣的な動きは、ベッドの右側に向かっていた。

では彼を左側へ向けて縛ってはどうか？ 彼は左手を掴もうとしたが掴めなかった。だがエアスの激しい怒りは祖母を意識していたために抑えられた。ジャックは部屋を出てケイティを見つけた。

「古いシーツを一枚見つけてくれないか。」

と、彼は言った。

「何にお使いになるんで？」

と、彼女は言ったが、彼の命令に従うために行った。

戻ってくると思つた彼女が言った。

「お母さんが、ハーバートさんを縛るつもりじゃないだろうね、と言ってみえますで。」

「僕は彼を縛ろうと思つているんだ。彼を傷つけないために。」

と、彼は答えた。

「ジャックさん、わしは病人のそばに居たくないんですが——病気が嫌いなんです。」

「それじゃこの布を試してみるから手を貸してくれ。」

二人は強い紐を幾つか作った。ジャックはその一本で、ケイティの手に船乗り結びを掛けた。そしてそれをテーブルの脚にしつかりと結びつけた。

「引つ張つてみて！」

と、彼は命じた。

「手が痛いかい？」

「全然。」

と、彼女は答えた。

ジャックは病室へ戻つた。ハーバートは静かであった。三人の兄弟はむつつりと黙つていた。彼らはとりわけそこから出て行きたがつていた。逃げたかつた。それは明らかであった。エアスはジャックの手をチラッと見た。痩せた赤い首と細い手足に莫大な力を秘めた大きな筋張つた鳥に似て、エアスには何か緊張して油断のないところがあつた。

「彼を傷つけないように縛るのが最善のことだと思つう。」

と、ジャックは答えた。

「そのやり方を知つている。」

兄弟は何も言わなかつた。そして彼のなすがままにさせておいた。それでジャックはその左手と左脚を縛つた。それから患者の体に紐をぐるつと回した。彼らはかなりよそよそしくそれを見ていた。エアスは兄の痙攣している左腕を離した。ジャックは病人の手を慰めるように取り、なだめるように握り締め、

次に自分の手を毛深い前腕に滑らせてひじのちょうど真上に紐をつけた。それから端をベッドの頭部に結んだ。彼は正しくやっているのだと確信していた。彼が一生懸命やっていたときエリスの奥さんが入ってきた。彼女も黙って見つめていた。それが終わったとき、ジャックは彼女を見た。

「それで大丈夫だと思ふよ。」

と、彼女はうなづいて賛同を示した。そして他の人々に、固まっている兄弟に言った。

「お茶を飲みに行ったらどう？」

彼らは、ドアを通り抜けるときにバンとぶつかり合った。ジャックは彼らがストックキングを履いているだけだと分かった。それでブーツを履くためにドアの外でしゃがんだ。

「いい考えだ！」

と、彼は思った。そして彼は自身のブーツを脱いだ。このことで彼は一層仕事に精を出せると感じた。

エリスの奥さんは、祖母の横に座ろうとして白いベッドのシートを掛けただけのスクリーンの向こうへ行つた。ジャックは煙っている蠟燭を消しに同じスクリーンの病人がいる側へ行つた。それから彼は、じつとしかめつらをして見つめている病人に向き合いながら、固い椅子に腰を降ろした。彼は患者を気の毒に思ったが、またむかつきもした。しかしながらハーバートが筋張った毛むくじやらの動きが自由な腕を上げて、毛深い鋭い顔を突き出したとき、ジャックは彼を助けたかった。

彼は獣医の忠告を思い出した。

「君、動物の信頼を勝ち取れ。そうすればそいつらを自由に扱えるから。馬でも人間でも、猫でもカナリアでもその信頼を掴め。そうすればやりたいように扱えるさ。」

ジャックは今やこの生き物の信頼を得ようとしたかった。これは意志の問題だと分かっていた。自身の意志で他の生き物の意志を掴むこと。だが優しく親切に。

彼はハーバートの固い指を自身の手にとつと掴んだ。そして優しく言った。

「静かにして。静かに。僕はここだよ。あんたの世話をするよ。休んで。眠つて。あんたから離れないから。めんどろを見よ。」

ハーバートは聞いているかのようにじつと横たわっていた。彼の筋肉は弛緩していた。物凄く疲れているようだった。ジャックはそれを感じた。彼は、ひどく、物凄く疲れていた。多分、女つ気のないレッド家の野蛮な生活が彼をこんなにも疲れさせたのであろう。彼は眠るように思われた。しかしまたグイッと目を開いた。そして目をぐるぐる回す痙攣的なものが再び始まった。

だが彼を縛っていた縛り目が彼を静めるように思われた。そしてジャックはまたもや空を掴む指を優しく掴んだ。すると病人の目はぐるぐる回りながら、不思議そうな目つきで若者の静かで無心な顔に留まった。ジャックは動かなかつた。そして再

びハーバートの緊張はほぐれるように思われた。彼は眠ろうと苦悶しているように見えた。だがその欲求はあまりにも大きかったので、眠れないのではという恐怖が病人をまたもや、恐ろしくも目覚めさせていた。

ジャックは意志を込めて静かに言い続けた。

「心配しないで、心配しないで、お爺さん。心配しないで。眠れるよ。面倒をみるからね。」

そして彼が死の沈黙のうちにこのようなことを喋っている、あたかも自分の生命の液体が彼の指から流れ出て傷ついた男の指に入っていくような気がした。彼は弱々しく元気がなかった。そしてハーバートは眠りに付き始めた。本当に眠り始めた。

ジャックはぼんやりして、美德が自分から出て行ってしまったように座っていた。そしてハーバートの指は力がなくなり、ホツとして再び子供のようになった。

少年は誰かが彼を軽く触ったように感じて少しハツとした。エリスの奥さんであった。もう行ったら、と薦めて彼を促したのだった。患者がぐつすり眠ってしまったからであった。それから彼女は出て行った。

彼女を目で追いながら、ジャックは戸口にもう一人の人物を見た。影から出てきた狼のようにじつと覗き込んでいるレツド・エラスであった。それでジャックは病人の重い、眠っている指を静かに離れた。だが彼は自分の位置を変えなかった。

そして彼は、エラスが再びいなくなったことに気づいた。

## 7

時間は遅かった。そして外では雨が騒がしく聞こえ、この世のものとは思われない風の音が聞こえてきた。エリスの奥さんが入ってきて、ラケット先生はまだ帰宅していない、おそらくどこかで駅伝馬車を待っているのだろうと囁いた。またレッドには帰ってもらいたいと告げたことを囁いた。

外の天候と火の燃える音をのぞいては死の沈黙があった。蠟燭は全部消えていた。

彼は祖母の声を聞いてびつくりした。

「赤ん坊の口の吸う音が……。」

「本を読んでいるんだ。」

と、ジャックは思った。本を読む明かりはなかったけれども。そしてお婆さんはなぜ眠らないのかといぶかっていた。

「ジャック・グラント、私はお前の母さんの父さんを知っていたよ。」

細い怒りっぽい声が聞こえてきた。

「彼が私の脚を切ったんだ。私は死にたかつたのに、悪魔のような奴は、どうしても死なせてくれなかつたんだ。つぶやきもせず、クロロフォルムなしで切ったんだ。」

そのか細い声は悪魔的に、夜の闇の中で目を覚ましていた。不活性な現在を貫いて過去から出てきた声のように。



「彼は何を気に掛けたのか！何も気にしなかった！全然。」  
祖母は続けた。

「そしてお前もおんなじだ。彼に似ている。お前も同類だ。お祖父さんの先祖がえりだ。一晩中、私の部屋での大とんまをどうするべきかね。お前であつてよかつたよ。」

ジャックは思った。

「おお、僕は一晩中ここに座っていないくはならないのか！」

「これから夜になる。」

祖母は、深い夜の中、悪魔的に目を覚ましている声で、細くも油断のない薄気味悪い声で、言った。

「快適になるように、炉辺へおいで。」

ジャックは立ち上がつてスクリーンの反対側へ行った。結局アームチェアは快適だろう。

「では、何かを話して。」

と、祖母が言った。

少年は一種の恐怖心に駆られながら暗がりを見き込んだ。

「それからお願いだから蠟燭を灯しておくれ。」

と、彼女は気難しそうに言った。

彼は獣脂製の蠟燭が載っている錫のろうそく立てを手に取つた。灯を消して黄色い火を点けた。彼女は、彫刻した象牙製の中国の像のように見えた。枕に囲まれてほとんど奇怪な姿をしていた。

「そうだよ、お前はお祖父さんに似ているんだ。あまり喋ら

ないずんぐりした頑固な男だったが、勇敢にことを為した。決して男の子供が生まれなかった。釘のように固い冷酷な男だった。」

「もつと家族が多かつた。」

ジャックは祖母の言葉に完全に反対しながら疲れて考えた。

「だけど二人の娘がいて上の娘とは縁を切つたんだ。お前の母親が妹だった。上の娘は問題を起こしたので、お祖父さんは彼女を追い出したんだ。変わるべきでない頑固者で、憐れみの心がなかつた。男とはそういうものなんだ。お前だつておんなじさ。」

ジャックはとても眠かつた。とても眠かつた。祖母の言葉は彼をチクチク突く何かに似ていた。(続)